

LINEを活用した読書会の実践ーコロナ禍におけるグループ読書の試みー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2024-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉岡, 尚孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000212

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



LINE を活用した読書会の実践 —コロナ禍におけるグループ読書の試み—

The Practice of Reading Circle Using LINE:
An Attempt of Reading Groups in the Situation of COVID-19 Pandemic

Naotaka Yoshioka 吉岡尚孝

はじめに（問題の所在）

新型コロナウイルスの感染拡大によって教育機関の学習環境は劇的に変化した。文科省は、高等教育機関に対して、それぞれの時期における感染の状況等を踏まえ、授業の実施や同感染症への対応に係る留意事項等を累次にわたって示し、感染対策の徹底と学生の学修機会の確保の両立を要請してきた（文部科学省、2021a、2021b、2021c、2020）。

筆者が所属する大学（以下、本学とする）では、2020 度より遠隔授業期間、休校・閉鎖期間はあったものの、他大学が対面型授業からオンライン型、オンデマンド型、LMS（Learning Management System）等の遠隔授業へ加速度的に移行するなかでも、十全の感染対策を講じた上で、対面型授業の実施にチャレンジしてきた。そのなかで、筆者が最も頭を悩ませたのは、直接の対面で行うグループワークの禁止であった。とりわけ、これまで実践してきた読書会 1 に関しては、グループで話し合うことなくしては成立しない。小学校国語科授業における読書会の可能性を実践的に追究してきた筆者は、読んだ本について話し合う活動が、読むことの楽しさを感じる上で有効であり、文章の魅力や価値を発見し、より深い読書につなげることができると考えている。「初等教材研究 A（国語）」の授業

における「読書会」は、大学生が国語科の教材（本や文章）の意味を生成するための場であるとともに、「読み」を問い直し、生涯にわたって読み続ける自立した読者としての大学生を育てる基盤となるため、その教育的意義から代替不可能である。そこで、LINE2 のグループトークを用いて、チャット形式で語り合う読書会（以下、LINE 読書会）を試みることにした。LINE を使用することにしたのは、道理としては、受講生の希望アンケート結果 3 と受講生全員がスマホを所有し、LINE をすでに利用していたこと 4 によるものであるが、筆者は「鉛筆対談」5 の知見と「打ち言葉」6 の特徴から、私的で個人的な印象を話合いの出発点とする読書会と LINE のグループトークは親和性が高いと考えた。LINE を活用することで、どのような読書会が成立するのか、どのように「読み」が語り合われるのか。

筆者が取り組んできた小学校の読書会型授業実践では、授業中の読書会において、子どもたちは夢中で本を読み、語り合いをとおして読みが深まっていくことを実感していたが、そうした「読むこと」が授業時間以外に見られなかったという課題が残った（吉岡、2019）。学生の生活に密着した LINE を読書会に活用することによって、暮らしのなかで、読んだ本や文章について友達や家族と語り合う読書習慣や読書環境に

つながる可能性があるのではないだろうか。

これまで SNS を導入した授業実践が報告されており、コロナ禍以前には、現実場面と SNS 上の双方で活発なコミュニケーションが行えること (村上・岩崎、2008、安達ら、2012) が明らかにされた。コロナ禍以降では、Zoom によるオンライン読書会 (井上ら、2020) やソーシャルリーディングシステムを用いた読みの交流の可能性 (Matsumura ら、2020) が報告されている。また、本実践のように LINE を Zoom や WebClass と併用した実践 (田中、2020) もある。しかしこれらの実践はいずれも非対面での声を発する交流を主としている。

本実践は、これまでに報告事例のない、対面で LINE のチャット形式によって交流することで、「対話的で親密な学び」と「感染防止」の両立をめざした対面型授業における読書会の試みである。

目的と方法

(1) 目的

本報告は、コロナ禍における読書会の実践において、LINE を活用することにより、学生の「読み」がどのように語り合われたのか検討することを目的とする。

(2) 方法

(ア) 考察対象とする実践

授業科目は、2020 年春学期「初等教材研究 A (国語)」(全 15 回) で、当該科目は教育学部の選択科目であった。考察対象とするのは、以下の 4 回の授業である。
・第 10 回 (2020 年 6 月 11 日) 第 11 回 (2020 年 6 月 18 日)「共通図書の LINE 読書会」
・第 12 回 (2020 年 6 月 25 日) 第 13 回 (2020 年 7 月 2 日)「選択図書の LINE 読書会」

(イ) 受講生並びに倫理的配慮

受講者は、小学校または特別支援学校教員を志す教育学科の 3 年生 14 名であった。受講生全員が LINE 読書会はもちろん、通常の読書会にも参加した経験がない。受講生の大半が小学校教育実習を控えていることから、その読書会が「教育的」となることは避けられない。今回の LINE 読書会では、児童のため、授業のための「教材研究」をいったん脇に置いて、教科書の文章をともに読み、語り合うことで、文章を深く味わう「読書」を目的とすることを受講生に伝えている。

倫理的配慮として、関西福祉科学大学の研究倫理審査委員会規定並びに個人情報保護規則に従った。本報

告について、公表の同意を確認し、全受講生から「同意する」の返答を得た。

(ウ) 学習材と授業形態

授業科目が、国語科授業づくりにかかる教材研究をとおして授業実践力を養うことを目的としているため、教科書所収の文章を学習材とした。「共通図書の LINE 読書会」では、「帰り道」(森絵都、光村図書 6 年) を学習材とする。「帰り道」は、性格の違う律と周也が帰り道を歩く物語で、同じ場面の出来事を律の視点 (第 1 章) と周也の視点 (第 2 章) から書かれた群像劇といえる文学的な文章である。「選択図書の LINE 読書会」では、受講生が小学 1 年から 6 年までの国語科教科書 (全 4 社) から希望する文章 (文学的な文章、説明的な文章、詩、伝記) を選択した。本報告で考察するグループの学習材は「「弱いロボット」だからできること」(岡田美智男、東京書籍 5 年) である。「「弱いロボット」だからできること」は、「弱いロボット」を開発研究してきた岡田が、テクノロジーと人との関係、共存していくための未来の在り方を問いかける説明的な文章である。

授業形態は、受講生同士が対面向き合う「「じか」(竹内、2018) の学び」とネットワークを通じて学び合う「ソーシャルラーニング」を組み合わせたブレンディッドラーニングである。「共通図書の LINE 読書会」では、任意のメンバー (3 人～5 人) でグループを構成した。「選択図書の LINE 読書会」では、希望する作品を選んだ者同士 (2 人～3 人) でグループを構成した。受講生は教室に集まっているが、飛沫感染を鑑み、マスクを着用し、2 m 以上の間隔を空けて座った。「共通図書の LINE 読書会」「選択図書の LINE 読書会」ともに、プリントしたテキスト 7 を各自に配布し、メンバーの中心にホワイトボード (話し合いボード) を置いた。それぞれ自分のスマホを用意し、LINE のグループトークを用いて、声を発することなく交流するように指示した。ただし、「えっ」と驚いたり、「んー」と唸ったりする声が漏れたりすること、指で「そうそう」と合図する、のけぞるポーズをとるなど、〈じか〉に相手がいるという安心感のなかで起きる反応については制限していない。

(エ) 実践の評価

LINE 読書会における「読むこと」のプロセスについて、授業展開に準じる受講生の発話プロトコルデータを可視化 (LINE のトーク履歴を LINE に実装された機能でテキストファイル化したものを抜粋) すると

ともに、受講生の事前レポートやふりかえり等を総合的に評価対象として、「読み」の深まりや「読むこと」の資質・能力について分析し、考察を加えた実践記録 8 に基づいて、質的検討を行う。なお、LINE のトーク履歴については、ユーザー名を仮名 (アルファベット) にするとともに、明らかな誤字脱字は筆者が訂正している。

授業実践

(1) 「共通図書の LINE 読書会」

(ア) 授業の概要

・実施日時 2020 年 6 月 11 日、18 日 (各 45 分)
本授業は「初等教材研究 A (国語)」(全 15 回) の第 9 回である。第 8 回までは manaba (朝日ネットによる教育支援システム) を利用して課題を配信するオンデマンド授業とそのフィードバックを主とする非対面授業であった。オンデマンド授業では、小学校国語科の定番教材「ごんぎつね」につづいて、新教材「帰り道」を読み、以下の課題について、それぞれがレポートを提出している。①物語の前半と後半 (1 と 2) にそれぞれタイトル (章題) をつけましょう。②律と周也のどちらが好きですか? その理由は? ③この物語のなかで一番大切なところはどこだと思いますか?

課題レポートで考えてきたことをもとに、対面授業 1 回目となる本授業で、LINE 読書会を実施した。なお、授業時間は感染拡大防止の観点から、45 分間となっている。

(イ) 授業の実際と考察

5 つのグループに分かれて着席し、プリントした「帰り道」のテキストを配布して授業を開始した。「読書会」の流れを授業者より説明し、今回の読書会の話題「読みながら思い浮かんだこと」を提示した。学生のまっすぐな眼差しに高まる期待と緊張が感じられた。グループトークにあたっては、①聞くこと、②待つこと、③受け止める (否定しない) こと、を周知したことで、一様に安堵の表情が浮かび、グループトークを開始することにした。

ここでは、グループトークにおいて、LINE のやりとりの回数が全グループ中最大であったグループ 1 と文字数が最大であったグループ 2 を取り上げ、客観的資料としてのトーク履歴を枠内に示し (抜粋、省略、下線及び番号は引用者による。)、グループトークの解説と考察を記す。

○ [LINE] グループ 1 の記録

・2020/6/11 (木) (参加者: A、B、C)

グループトーク開始: 14 時 11 分 終了: 14 時 45 分
グループトーク開始から、各自無言でテキストを見返していたグループ 1。読み直しているというよりも、ページをめくりながら、誰かが発言してくれるのを待っている。ときおり A と B が目を合わせて苦笑いを浮かべ、二人の表情を C が目で追う。声を出さない中、ためらいと逡巡の様子が感じられた。5 分が経過し、A が授業者に「何言ってもいいん?」と小声で確認したあと、スマホのキーを叩いた。

14:16	A	A が好きなのは、周也の方 ^①
14:17	B	私も周也のほうが好き
14:19	C	律のほう
14:19	A	どうして? ^②
14:22	C	自分が律と似ているなど感じたから
14:22	A	うんうん
14:22	A	どんなところ? ^③
14:24	C	律と同じように周りの友達に物事を合わせるのがとても苦手。

A の最初の発言 (下線①) に B、C が応答し、A はその理由を尋ねたり、相手の発言を掘り下げたりしている (②、③)。それらの質問によって、C は「律」と自分を重ねながら、思いを表現することができた。登場人物について話すが、普段は口にしない自分自身について語ることとなり、自分の経験や立場を登場人物に重ねることで、自分を客観的に捉えることもできる。

14:27	A	もし雨が降らなかったら 2 人はどうなっていたのか
14:27	A	天気とかじゃなくて・・・
14:28	A	あの
14:30	A	ごめん
14:30	A	天気の話
14:31	B	天気とは
14:31	C	もし晴れたらとかって事じゃないん?
14:31	A	あ、そんなかんじ!

A は物語のターニングポイントと考える「通り雨」を話題にしようとするが、うまく伝えることができない。C の確認によって、A の疑問が明確となった。

14:35 A Aも雨が降ってなかったらそのまま2人は離れていったと思う
14:35 A これってど一なればいいん？
14:35 A 終わり^④
14:36 B でもさ
14:36 B 逆に仲直りできずに、仲悪いままやったらどうなんやろ^⑤
14:37 A 2人とも次の1歩が踏み出せなかった
14:37 C あー、自然消滅しそう
14:37 A 周也は人の話聞かんままやし
14:37 A 律は自分の意見言えんままとか？
14:38 B お互いに成長できんってことか

「通り雨」が登場人物2人の「仲直りのきっかけ」となっていることを共有し、Aはその話題の終了を告げる（④）。しかし、Bの問いかけ（⑤）によって、「通り雨」が律と周也の関係とともに、それぞれの成長の転機となっていることに気づいていく。Bは、事前に提出した物語の前半のタイトルを「律の一步は天気雨」とし、Aと同様に「天気雨」に着目していた。そのときのレポートに、次のように記している。「自分のこれまでのやり方を変えようとしても簡単には変えられない。（中略）「性格を変えよう」「自分が変わろう」と思っても、何をどのように変えればいいのか分からず、逆に相手に違和感を与えてしまうことがある。」。AやCとの「天気雨」をめぐるやりとりをとおして、ひとりでは思い至らなかった人生をあやつる思いがけなさにBは気づくことができた。
・2020/6/18(木) (参加者：前回と同じ)
グループトーク開始：14時18分 終了：14時45分
前週につづきとなるこの日もグループトーク開始直後は発言がなかったが、戸惑いの雰囲気はなく、スマホを片手に、グループのメンバーを見ながら、自分が考えていることをどのように相手に伝えるか、言葉を選んでいた。

14:26 A 周也の「ひょっとして・・・」の後には何が続いているのか^⑥
14:28 B どちらかを選ぶ事にこだわりすぎていたのかもしれない
14:29 A めっちゃカッコいい
(中略)
14:32 A Aは、「ひょっとして両方好きと

いうのもひとつの答えなのではないか」 とか考えた
14:32 B なるほど！
14:32 A Cくんのもいいと思う
14:33 A あ！そっか 言葉のキャッチボールに初めて気づいたんか^⑦
14:33 C あ、そう！^⑧
14:33 B だから普段やったら言葉を返すけど、黙ってしまったってことやね
14:34 A うんうん
14:34 C うん
14:34 A ちゃんと律の言葉の受け止めたもんね
14:34 C (っ'')ゝ =👉、('')ゝ

Aは自分が気になったことを問いかける（⑥）だけでなく、Cの答えから物語のキーワードとなる「言葉のキャッチボール」を見出した（⑦）。Aの指摘によって、Cは自分が、この物語を「周也と律がキャッチボールできた物語」として読んでいたことにあらためて気づき、驚きの声を上げている（⑧）。Cが書き込んでいるアスキーアート（絵文字）は、「周也と律のキャッチボール」を表している。それぞれの個性を生かしたアンサンブルであり、即興的な掛け合いが生まれつつある。

14:40 B 言葉を思い出す→律の言葉→受け止める→気づく / 言葉を思い出す→律の言葉→返す→気づく
14:40 B ということ？
14:41 C そういうこと！
14:41 A え？ 返してなくない？
14:42 C うなずきを言葉と捉えた
14:42 A 納得！

「周也と律のキャッチボール」をめぐるって、周也が「言葉を受け止めたこと」と「言葉を返したこと」のそれぞれの考えを話し合うなかで、Cが「ごちゃった」と素直に反応したり、Aが勘違いをしたりしたあとで、両者を統合した協働的な読みが産出している。
事前のレポートで「私は、言葉にして伝えることを避けてしまうことがあり」「何も言わないほうがいいと考え黙ってしまう癖がある」と記していたBは、授業の振り返りにおいて、「自分の思いを言葉にする

ことで互いに理解し、自分の考え方やものの見方に気づくことができることを知った」と書き込んでいた。Aは「みんなの意見を聞けてよかった。」と感想を述べ、Cは「僕はグループワークの時にあまり率先して話す事が出来ないのですが、今回の方法でやると話すことが出来たのでとても良かったです。」と初めての試みに満足していた。
○ [LINE] グループ2の記録

・2020/6/11(木) (参加者は、D、E。Fは欠席)
グループトーク開始：14時11分 終了：14時45分
グループトーク開始からD、Eともに熱心にテキストを読み直し、9分後にDが最初の発言を送っている。

14:20 D 自分には幼稚園時代から中学三年生頃までよく喧嘩してきた友達がいる。物語とは少し異なるが、互いに遊び半分でちょっかいをかけて、それが気に食わなくてケンカになった。どちらかが互いに思っていることがあるのに、それが表現しきれずにムズムズする。それが、変に相手に伝わって、余計にすれ違う。この物語を読んで、子供時代、そんな誰もが通る道を、改めて心に思い浮かべた。（後略）

幼児期から思春期までをふりかえりつつ、そのときの心情を語るという、体験に基づく「読み」であるが、LINEのメッセージとしては非常に長い独白であった。

14:27 E 律の方は「こんな」の中で言いたい言葉が出てきてないことを出てくれるように出来たら周也と仲良くなれると考えてるのかな？^⑨
14:28 D 確かに。かたや、周也の方は、はっきりしろやって、思っているから、それが伝わって、律は余計に焦っている。
14:31 E 周也が焦ってるのは文の中に出てたけど律の発言から更に焦ってるって考えは思いつかんかったなあ。^⑩一応周也是言いたいことが頭の中にまとまってないような気がするなあ
14:33 D 周也のばあい、律と仲良くしたいが為だけにしゃべっているだけやから…。でも、一番大事なのは、言葉ではなく、「だまってでもうなずく」こと、共感できることだと最後は二人とも気づく

きっかけになっている。
14:37 E 確かに最後には互いの気持ちを共感し合ってるような描写があるなあ 律は言いたいことを最低限しか発言してなくて周也は関係ない内容を含めての自分の気持ちを最大限に出しているってところから性格的には真逆なような気がする

Dの独白を読み、Eはさらにテキストを読み返したあと、本文にある「こんな」の意味を問う（①）。その後もテキストのページをめくりつつ、叙述に基づきながら、Dの発言を価値付けている（②）。Dも先行する過去の記憶に基づく自分なりの「読み」を、テキストの描写と結びつけながら、捉えなおしている。やりとりの往復は少ないが、時間をかけて「こんな」の意味を吟味することができた。授業後に教室の外で、EがDに「最後に二人の登場人物の性格が変わっていたことを発信しようとしたけど、間に合わなかった。」と話していた。
・2020/6/18(木) (参加者は、D、E、F)
グループトーク開始：14時18分 終了：14時45分
グループトーク開始早々に発言したDの発言は、前回のはじまりと異なり、相手に尋ねる形となっている。

14:18 D この前、Eくんが言っていた、登場人物の性格が逆転していったっていうのは、どうしてそう思ったの？^③
14:22 D Fさんは、何か、気になったり引っ掛かったりした言葉とか場面とかある？^④それか、先週のライン見て、感じたこととか。^⑤

Eの前の発言から「どうしてそう思ったの？」と質問し（③）、前回欠席であったFには、気になるテキストの言葉や場面、前回のDとEのやりとりについて問いかけている（④、⑤）。

14:26 F 登場人物の性格が逆転していったって言うのはどういう事か、くわしく知りたい！^⑥
(中略)
14:32 D 律は、これを機に自分の気持ちを具体的に言えるようになっていき、周也は相手の気持ちを受け入れることができるようになるかもしれないね。^⑦

14:32 E @D 仮にこの話に続きを作るとしたらどうする？とか言われたらこんな答えもありかもしれない
14:33 E [話し合いボードの写真] 今までのぶんのまとめたやつです！

Dの質問やFの要望(⑥)を受けて、Eが「登場人物の性格の逆転」について説明し、そこからDは物語には書かれていない「律と周也のこれから」について想像を広げている(⑦)。Eはここまでに出的意見をボードにまとめ、それを写メしたものを送信した([話し合いボードの写真]は、実際のLINE上では、写真がアップされている)。

14:34 F 律→意見を積極的に伝えられないって書いてるけど、本当の所どうなんだろう？
(中略)
14:35 D 積極的に伝えられないというよりも、うまく伝えられなかったが適切じゃない？
14:36 E ということは
律→自分の考えをまとめることを難しく感じている
周也→相手の気持ちになって考えることを難しく感じている
とかいう考え方はどうやる？
(中略)
14:42 F きっと、周也は相手の気持ちになって考えることは難しいんだろうけど、表情とかをみて、「あ、今不機嫌なのかな？」とかわかるのかもしれないのかな？っておもった！
14:42 D @F 確かに。表情とか見てちゃんと気づいている！
14:42 F @D そうそう～
14:43 D [おおーのスタンプ]⑤
14:43 E [話し合いボードの写真]
14:44 F 昼休みの時の律ってさ、
(☹) こんな表情とかするのかな？
(´_´) なんかな？
14:44 E どっちかと言うと上の顔かな？笑⑥

話し合いボードの写真を適宜修正する形でグループトークが進行し、協働的な読みが形成された。〈読者〉と〈テキスト〉、LINE 読書会という〈状況〉の三者の

交流によって、さまざまに展開する可能性を有する〈物語の意味〉が作り出されたといえる。Dは「何回も読み返し、それを共有していく中で、読み解いていくことができるんだなあ。」とLINE 読書会をふりかえる発言をしている。読書会は、他者との交流を通じて、自分の読みを問い直し、テキストを読み返しながら、共同で意味をつくりだすことをその本質とするが、LINE 読書会においては、他者の読みはもちろん、その交流(自分たちなりの物語の意味をつくりだすプロセス)を読み返すことができる。LINEのトーク履歴は、読むという行為、読書という営みの軌跡となる。また、記録(ログ)が残ることは、学習成果と評価情報としても有効に作用する。

授業者として知るかぎり、非常に真面目なDとEが、[おおーのスタンプ](実際は猫のイラストと「おおー！！」という文字が入ったLINEスタンプ)を使ったり(⑧)、顔文字の質問に「笑」とつけて返事したり(⑨)することは意外であったが、今回のLINE 読書会が楽しいグループ読書の時間であったことの象徴ともいえる。Fはこの日の「ふりかえり」において、「45分の読書会ではあつという間で、90分あってもきつと足りないだろうなあと感じました。」と記している。

(2) 「選択図書のLINE 読書会」

(ア) 授業の概要

・実施日時 2020年6月25日、7月2日(各45分)
「共通図書のLINE 読書会」に続き、学生が選択した図書によるLINE 読書会を実施した。今回の話題は「学習材としてのその作品の魅力」とした。授業時間は感染拡大防止の観点から、ひきつづき45分間となっている。

(イ) 授業の実際と考察

授業開始時にテキストを配付しながら選択図書とグループメンバーを発表し、各LINE グループを作成した。5つのグループに分かれて、各自がスマホとテキストを持ち着席したあと、各々テキストを読み直し、書かれている内容をグループトークで確認した。

本報告では、LINEのやりとりの回数が全グループ中最大であった「弱いロボット」だからできること」を選択したグループ3の実践記録を以下に記す。なお、グループメンバーのDは、「共通図書のLINE 読書会」で取り上げたグループ2のDと同一人物である。

○[LINE] グループ3の記録

・2020/6/25(木)(参加者は、D、G、Hは欠席)
グループトーク開始：14時25分 終了：14時45分

開始時刻からまもなくGもDもスマホに文章を入力し、話合いを始めた。この日は20分間という短い時間であったが、相手から送られてくるメッセージとテキストと読みながら、2人とも最後まで指を動かしながら続いていた。

14:39 G 赤ちゃんが人を引き寄せると、弱いロボットが周囲の人々の協力を引きつけるのは、似てはいるけど本質的にはかなり違うと思うので、なんか言葉にするのは難しいですが、引っかかる部分があります。①
14:41 G でも、確かに「弱さ」という意味では本質的に同じなので、なにが引っかかるのか自分でもよく分かりませんが、何か引っかかりました②

グループトーク終了間際にGが「赤ちゃん」と「弱いロボット」を照合しながら、自身の「引っかかり」について発言をしている(①、②)。体調不良で欠席したHが、回復後(2020/7/1)にトーク履歴を読み、以下の返事をしている。

15:29 H 2人のトーク読みました！！わたしなりの意見書きますね！(中略)赤ちゃんを産み出すこともロボットを作ること、広い意味で未来をよりよくしようとするという意味で変わらないと私は思いました！③
15:29 H まだ深く読めてないのでまた読み直します👏(中略)また、明日話し合えるといいね👍
19:46 D @H👍。
19:55 G 今、考えていること。(後略)

Gの「引っかかり」であった「赤ちゃん」と「ロボット」の対照について、自分の考えをまとめ、送信している(③)。それに対し、DとGも反応し、授業前夜に翌日の読書会を楽しみにしていた。

LINE 読書会は、いつでもどこでもできることが大学の学修において、その魅力となる。学生の過度な負担やストレスにならないように配慮しなければならないが、授業外において、時間や場所を選ばずに、課題に取り組むことができる。学生が空いた時間や隙間時間に自分や友達「読み」について考え、発信できることの有用性は大きいと考える9。また、受講生同士

がグループトークの間の1週間や授業後に、他の授業や大学内で顔を合わせたときに、作品について言葉を交わしながら、「あとでLINEする」と言い合うこともあったと聞いている。考えを整理して書き込みたいということのほか、適度な緊張感をもって「読み」を交流していたのではないと思われる。

・2020/7/2(木)(参加者は、D、G、H)
グループトーク開始：14時20分 終了：14時45分
前回の授業同様に、すぐに話合いを始めた。

14:22 D 220ページ11行目の、これからはテクノロジーの進歩～心地よいものから遠ざかってしまう…」から、目的を考えずにやみくもに便利なテクノロジーを作ると、かえって人間にとって高性能ではなくなるのかなと思いました。この本で、児童に、家でも保護者と話し合ってほしいと思いました。④
14:29 H これからもテクノロジーは進化してくから世代を超えて読んでほしい！100年前の人がどんなことを感じるのか100年後の人がどんなことを感じるのか、時代に合せて捉え方も変わってきそう！！⑤
(中略)
14:45 G 「弱いロボット」って名付けたのはすごい⑥

Dの発言(④)を受けて、学習材としての魅力について語り合いながら、読んでほしい読者について、それぞれが考えている。世代や時代による文章の受け取り方の違いへの言及(⑤)があり、「100年後の人へこの本の紹介文を書かせる活動」といった実際の授業構想へと話合いは進展しつつ、「テクノロジーと心地よさ」をめぐる、Hがリボンドール(赤ちゃん型の人形)を紹介したり、文章で事例として掲載されているもの以外の「弱いロボット」をYouTubeで見たりしていた。グループトークにおける協働的な読みの生成であり、説明的な文章の題材への探究といえる。授業時間ぎりぎりまでやりとりを続け、最後にGがあらためて題名の「弱いロボット」という名づけを評価(⑥)し、この日の授業を終えた。

授業後、HはLINEでグループメンバーに「今日の感想」を送り、関連する図書の紹介をしている。以下に示す。

15:50 H 今日の感想 H
「弱いロボット」だからできることの学習材から、ここまで話が深まるとは思わなくて驚いています💦
(中略) 関連する本ですが、この学習材を読んで『10年後、君に仕事はあるのか』という本を思い出しました。(後略)

同日、Dも読書会のふりかえりを記し、ロボットと人間の在り方を考える文学作品を読みたいと述べた。翌日、「一晩考えたのですが、…」と前置きし、以下のように、LINE読書会の価値を追記した。

15:10 D 昨日の感想(追記)
ラインを使った読書会は、読み・書き言葉なので、相手の反応がわかりづらいので時々不安になったり、送信したあとの相手の反応を見たくなるときもありましたが、気になったときに何回も読み返せるというのが良いなと思いました。(後略)

HやDの感想に対して、Gは送信取り消しを数回くり返ししながら、1500字というLINEとしては異例の長文で授業をふりかえった。最後は、教材研究の大事さを実感したこととグループメンバーへの感謝の言葉でしめくくられている。以下にその一部を示す。

21:37 G LINEで「弱いロボット」についての読書会をしてみて、文だと表情やリアクションが見れなくて、自分はズレたことを言っているのではないかと不安になることもありましたが、一人では不可能なほど、2人のお陰で深く読み解くことができました。(中略) ありがとうございます！

(3) LINE読書会の成果と課題

LINE読書会の成果は、以下の2点である。

①読書会において、LINEが協働的な読みの実現を支援するツールとして機能した。

3つのグループのLINE読書会について考察したが、それ以外のグループにおいても、LINE読書会は活況であった。文学的な文章においては、人生にかかわる〈物語の意味〉が問われ、説明的な文章においては、

社会的事実に基づく〈題材への探究〉が立ちあがった。それは、グループトークをとおして考え、その考えを対話的に検討しながら、意味をつくり出すというインタラクティブな学びの実現といえる。はじめこそ戸惑いが見られたが、絵文字やスタンプだけでなく、投票箱やメンションなどLINEに実装された機能を巧みに生かしながらグループトークを展開し、読書会を自分たちのものとしていった。なかでも、アナウンス機能は、今、自分たちが話し合っている「話題」を上部にピン留め固定して表示できる点で読書会に有用であった。「共通図書の読書会」において、あるグループでは、「この距離感よ」の言葉とともに律と周也が歩く挿絵をスマホのカメラ機能で撮影したもの(いわゆる「写メ」)を送信し、その挿絵について話し合う場面があった。このことは、LINEが「教育の主体的なエージェントになる」10とともに、文章のみならず、画像や音声といった異なる表現メディアによって組み立てられたテキスト(マルチモーダルなテキスト)について語り合えることの可能性も示唆している。同時に、挿絵を共有する際、となりに座るメンバーに自分のスマホの画面を直接提示して、当該の画像を見せたこと(当然、そのメンバーのLINEにも同じ画像は届いている)の意味も考える必要がある。同じ空間で同じものを見るということ、なまの視線にふれて共同注視することは、他者の息づかいを感じながら、他者の身になることであり、先行研究での非対面授業では得られない対面授業の所産といえる。

②LINE読書会は、教室を越境し、外の社会を志向し、いつでも、どこでも読書とつながりうる。

「共通図書のLINE読書会」において過去の帰り道の記憶が想起されたのは、作品の力によるものであるが、そこから現在の友人との関係を考えたり、コミュニケーションのとり方について思いをめぐらせたのは、コミュニケーションツールであり、ソーシャルメディアでもあるLINEを使用していることの影響が大きいと考える。「弱いロボット」だからできることを読み合ったグループが、文章の中に留まるのではなく、「人とテクノロジー」や「共生」について考えていたが、他のグループにおいても「社会」「命」「勇気」「死」という大きなテーマについて考え、授業後もテーマと関連する図書や映画をLINEで紹介し合っていた。読書会で『わすれられないおくりもの』(スーザン・バーレイ)を読んだ学生が、夏休みに耳にした楽曲をきっかけに、あらためて本を読み直したとグループLINE

で報告し、それを読んだ別の学生がアナグマに捧げるレクイエムを作曲し、LINEで共有するということがあった。LINE読書会は、時空の制限を受けずに、過去や未来を往還し、スマホの画面に映る現在の私たちに読書を核とした問いを投げかける。学生の生活必携ともいえるLINEの中に「読むこと」が埋め込まれることで、読書の生活化、生活の読書化につながる可能性がある。そこでの「読むこと」は本や文章のみならず、日常のあらゆる出来事が対象となり、クロノス(まっすぐ進む物理的時間)な学びを越えたカイロス(ふとしたきっかけで訪れる意味的時間)な学びが成立する。

LINE読書会の課題は、以下の2点である。

①管理運営上の問題

LINEにおいては、「LINEいじめ」や人間関係のトラブルが社会問題となっている。脅迫、性的搾取などの犯罪行為につながる発言や犯罪行為そのものに遭遇したという事案やアカウントを乗っ取るための巧妙な偽造トークも報告されている(LINE、2013)。授業者が全グループにメンバー登録することで、LINE上のやりとりに気を配り、グループ内でのハラスメントや同調圧力等に注意を払い、トラブルを未然に防ぐことが求められる。また、学生へのLINE上のマナーやスマホ依存防止の教育も必要となる。授業でLINEを使用することを、参加学生全員の同意を得た上で実施することは当然であるが、学生の心理的負担や通信環境等による継続困難が判明した場合は、可及的速やかに授業でのLINEの使用を中止しなければならない。LINEを使用できない、あるいは使用したくない学生がいる場合もふくめて、LINEに代わる手段(例えば、LMSのスレッド機能)を用意しておく必要がある。上記のトラブルや「スマホで生じるミスコミュニケーション」(堀田、2017)等のLINEのデメリットを考慮した上で、慎重に管理運営することが課題となる。

②授業者の介入の問題

読書会の授業において、グループの話し合いが停滞したり、メンバーの役割が固定化してしまったりするときに、授業者がグループトークに適切に介入することで、読書会をよりよく推進することが可能となるが、LINE読書会では、授業者が全グループにオブザーバーとしてメンバー登録すると、話し合われている内容を随時確認することができる。しかしながら、筆者は授業中の読書会において、各グループのLINEの通知音が絶え間なく鳴るなかで、全てのグループにLINEを通して必要な支援をすることができなかった。LINE

を通した必要な支援ができなかったにもかかわらず、本実践において一定の成果を挙げることができたのは、参加者である学生のほぼ全員が教員を志望し、さらに教育実習を目前に控えた状況から、話し合いをよりよいものにしようとする意識がめいめいに働いていたという特殊な条件があった。また、授業中にできなかった支援を補うべく、授業者が授業後にLINEのトーク履歴から話し合いのプロセスを確認し、評価と次回にむけたポイントをLINEでコメントし、フォローした。

授業中のLINEによるリアルタイムな介入をめざすばあい、トークルームを移動しながら、それぞれのグループの話し合いの進展と読みのプロセスを見極め、瞬時に判断し介入するファシリテーションスキルとLINEのリテラシーが要求されることになる。

①②の課題は、学生が主体的であるほど、授業者としての慎重な支援が要請される。また、授業におけるLINE読書会がその後の読書習慣の形成に資するのかは、本実践では明らかにできず、残された課題となった。

おわりに(まとめ)

本報告では、コロナ禍での大学の授業におけるLINE読書会の実践をとりあげ、学生がLINEのグループトークでどのように語り合い、グループ読書を展開したのか、その実践的意味を検討してきた。実践の考察から、グループトークにおける話し合いの実相とLINE読書会による協働的な読みの生成が明らかとなった。LINE読書会は、じっくり相手の言いたいことを考え、自分が話す内容を吟味することができる。その時間が、うまく伝えられなくても、どうにか自分なりの表現をしようとする意欲につながっている。読書会後には、その表現のやりとりを読み返すことができる。Zoom等のWeb会議ツール、LINEのグループ通話では、そうした省察的な時間にはなりにくい。LINEによるグループトークは、現代の鉛筆対談であり、協働的な読みの実現を支援するツールとなった。

LINE読書会は、学生が読むことの楽しみを分かちあい、ともに生きることの歓びを見出すプラットフォームであった。その空気感や問い合いは、一般の読書会における終了後の懇親会や、オンライン読書会における閉会後のアフタートークに近いものであったと思う。自分のタイミングで発信し、いつでも、どこでもLINE読書会をスタートできることは、比較的拘束の少ない大学生だからこそ可能となるメリットといえる。

本報告では、LINE 読書会が大学生の読書習慣の形成にどのような影響を及ぼすのかという課題とともに、初等中等教育の国語科授業への応用可能性について検討できなかった。今後はその点について究明し、実践的な提案をしたい。

【註】

- 1 読書会はグループで本を読み、話し合う集団的読書活動である。その活動は、読者反応理論や構成主義に基づく読書研究の成果、テキストの意味の社会的構成の過程に関する議論を踏まえている。
- 2 LINE は、ユーザー同士であれば、無料で個人間はもちろん、複数人でトーク（チャット）・音声通話・ビデオ通話等ができるコミュニケーションアプリである。
- 3 受講生に、話し合い活動の方法についてのアンケートを実施した（受講生 14 名が全員回答）。① Teams による教室内での遠隔会話（チャットを含む）、② LINE、③ Facebook、④ Twitter、⑤「Ednity」や「Edmodo」といった教育用 SNS の利用、⑥紙と鉛筆による筆談、から希望するものを 1 つ選択させたところ、全員が② LINE を選択した。
- 4 マイナビ（2021）の「大学生のライフスタイル調査」では、大学生の 99.7 % がスマホを所有しており、大学生の 96.3 % が LINE を「よく使う」としている。
- 5 鉛筆対談とは、会話形式の筆談であり、書き言葉による談話である。柳内（1950）は、鉛筆対談について、「気どらないふだんのことばで、おたがいに鉛筆で話をしていく」ものとし、「一枚の紙の上で、短い手紙が往復するしかけ」としている。筆者は小学校現場で、子どもたちが相手の言葉を丁寧に受けとり、じっくりと語り合ってほしいときに、鉛筆対談を取り入れてきた。
- 6 「打ち言葉」とは、メールや SNS のコミュニケーションに使われる「話し言葉の要素を多く含む新しい書き言葉」（文化庁、2018）を指す。
- 7 柴田と大村（2018）では、認知心理学の見地から、紙の本と電子メディアの本を比較して、紙の本のほうが「深い読み」ができると実証している。M. ウルフ（2020）も同様の結果を示した上で、紙で読むリテラシーとデジタルで読むリテラシーを適切に活用する「バイリテラシー」を育むことが望ましいとしている。

- 8 実践記録は、授業実践の客観的資料だけでなく、感情・情動という「意識的・内面的過程」を記録してはじめて、「授業の構造がみえる実践記録」（高田、1996）となる。ここに、いわゆる「実践報告」とは違う実践記録の価値があり、「現実として見えるものを手がかりとして見えないものを観ていくこと、それを含めて語ること」（秋田、2005）が実践記録の要件といえる。
- 9 大学生の授業に関連する自律的学習時間の少なさが指摘されて久しく、文部科学省・国立教育政策研究所の調査（2021）によると、大学生の授業期間中の平均的な 1 週間の生活時間における授業に関する学習時間は 5 時間以下が 67 %、そのうち 9 % は「まったくしない」と答えている。一方、同調査の大学生の授業期間中の平均的な 1 週間の生活時間におけるスマホを使用する時間は平均 13 時間となっていて、11 時間以上が 48 % という結果が出ている。
- 10 佐藤（1993）は、1992 年に 1 人 1 台のノート型パソコンを活用した港区神応小学校の苺宿実践の解説として、子どもたちの学習に「思考の私的空間が他者との交流の空間にもなりうることを発見した喜び」を見いだすとともに、コンピューターは「教師と生徒と知識と社会の相互関係に質的な変化をもたらす機械である」とし、その機能の特徴および教室の学習に革命的な変化をもたらす可能性と危険性に言及している。

【引用文献】

安達一寿、加藤亮介、松本修一（2012）「facebook を活用した教育活動の可能性と課題」『年会論文集』28, pp.290-291

秋田喜代美（2005）「実践記録と教師の専門性」『教育』No.719, 国土社 ,p.50

文化庁（2018）「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」Retrieved from https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/_/icsFiles/afieldfile/2018/04/09/a1401904_01.pdf (2021 年 12 月 1 日)

堀田千絵（2017）「高度な自他推論能力が求められるスマホによるコミュニケーション」『子どもとスマ

ホ』,pp.17-21

井上和興、浜田紀宏、李瑛、紙本美菜子、孫大輔、朴大昊、立花祐毅、櫻井重久、谷口晋一（2020）「アクティブ・ブック・ダイアログを活用したオンライン読書会—学習コミュニティ形成への試み」『日本プライマリ・ケア連合学会誌』43(4), pp.145-147

LINE（2013）「LINE の安心安全ガイド」Retrieved from <https://linecorp.com/ja/safety/> (2021 年 12 月 1 日)

MATSUMURA Kazuya, UNOKAWA Hiroshi, & SATO Kiwamu（2020）Potential Factors and Satisfaction of Readers in Social Reading Using Other's Comments,Int. Journal Affect.Eng.,Vol.19, pp.119-125

文部科学省（2021a）「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係る Q&A 等の送付について（令和 3 年 5 月 14 日時点）」（令和 3 年 5 月 14 日事務連絡）Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20210514-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2021 年 12 月 1 日)

文部科学省（2021b）「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針の変更及び大学等における同感染症への対応に関する留意事項等について」（令和 3 年 5 月 7 日）Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20210510-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2021 年 12 月 1 日)

文部科学省（2021c）「新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言を踏まえた大学等における新型コロナウイルス感染症への対応に関する留意事項について」（令和 3 年 1 月 8 日高等教育局長通知）Retrieved from https://www.chubu.jp/documents/main/news/8801/8801_0bf1f9c5cc3ff49c0fa61c98a37dc842.pdf (2021 年 12 月 1 日)

文部科学省（2020）「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドライン」（令和 2 年 6 月 5 日付高等教育局長通知の別添）Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_5.pdf (2021 年 12 月 1 日)

文部科学省・国立教育政策研究所（2021）令和元年度「全国学生調査（試行実施）」の結果について（報道発表）Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20201218-mxt_koutou01-1421136_1.pdf (2021 年 12 月 1 日)

村上正行・岩崎千晶（2008）「大学における SNS を活用した教育改善の支援」『教育メディア研究』14,pp.11-16

マイナビ（2021）「2022 年卒大学生のライフスタイル調査」Retrieved from https://www.mynavi.jp/news/2021/02/post_29766.html (2021 年 12 月 1 日)

佐藤学（1993）「変化する教室」佐伯胖、苺宿俊文、NHK 取材班『教室にやってきた未来』NHK 出版 , p.48

柴田博仁、大村賢悟（2018）『ペーパーレス時代の紙の価値を知る—読み書きメディアの認知科学』産業能率大学出版部 ,pp.1-272

高田清（1996）「授業研究における実践記録の意義と方法」『教育実践研究』第 4 号 ,pp.44-45

竹内敏晴（2018）「「から、だ」ということ」稲垣正浩、三井悦子編『からだが生きる瞬間』藤原書店 , p.66

田中由美子（2020）「Zoom、LINE、WebClass を併用した遠隔授業の実践」『九州女子大学紀要』57(1), pp.105-117

ウルフ・メアリアン（2020）太田直子訳『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳』インターシフト , pp.1-296

柳内達雄（1950）「作文以前—鉛筆対談について」『教育社会』5(6), 西荻書店 ,pp.30-33

吉岡尚孝（2019）「小学校国語科授業における読書会の可能性—「気配」を讀みの手がかりとして—」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』137,pp.167-170